

仙台育英に青森県ゆかりの2人

須江監督（八戸大出） 秋元選手（聖愛リトルシニア出身）

東北勢で初めて夏の甲子園を制した仙台育英。チームを率いた須江航監督は八戸大（当時）、二塁手として先発出場した秋元響選手は弘前聖愛リトルシニアの出身だ。「えらいことをやってくれた」「自分のことのようにうれしい」。悲願を達成した青森県ゆかりの2人の恩師は教える子の快挙をたたえた。

須江監督は仙台育英（県いわき市）で指揮をから八戸大に進み、入 執る藤木豊さん（57）学当初から野球部の学生コーチとしてチームを支えた。当時の監督で、現在は東日本国際大（福島）「地方大会のベンチ

「努力報われた」快挙に恩師祝福

外を甲子園で起用するなど選手をよく見てい。須江監督の印象をこう語ったのは、2学年上だった八戸学院大硬式野球部コーチの新沼絹貴志さん（40）。「自分のことのようにうれしい」と教える子に。秋元選手を指導した鳴海光雄さん（61）は、「自分をよく観察して、大きくなつていて、表情から自信がみなぎっていた」と高校3年間での成長に舌を巻き、「自分のことのようにうれしい」と教える子に。秋元選手を指導した鳴海光雄さん（61）は、「自分をよく観察して、大きくなつていて、表情から自信がみなぎっていた」と高校3年間での成長に舌を巻き、「自分のことのようにうれしい」と教える子に。秋元選手を指導した鳴海光雄さん（61）は、「自分をよく観察して、大きくなつていて、表情から自信がみなぎっていた」と高校3年間での成長に舌を巻き、「自分のことのようにうれしい」と教える子に。

「後に続いていかないと」
2011、12年の93、94回大会で2年連続の準優勝を果たし、東北勢初の全国制覇に迫ったことがある八戸学院光星。チーム関係者は仙台育英の悲願達成を祝福しつつ、決意を新たにしていた。
光星は今夏も甲子園に出場したが、惜しくも2回戦で敗退。仲井宗基監督は仙台育英の優勝について「率直に素晴らしい」とした上で、「これから東北全体のレベルが上がったと言われ

光星、決意新た

るように、後に続いていかないと」と力を込めた。
今大会で主力として活躍し、この秋から新チームの主将を務める中澤恒貴選手は「仙台育英は2年生の活躍があつて優勝まで勝ち進んだ。悔しい気持ちが大い」と率直な思いを明かす。
選抜大会出場を懸けた戦いを控え、「県、東北大会で優勝し、甲子園に行く。戦うのは新チーム。仙台育英と戦うことになつても恐れることはない」と意気込んだ。
（上村公徳）